



特集1 学び続ける指導者たち

生徒は先生の背中を見て育つ

ピティナピアノコンペティション、ピティナピアノステップ、室内楽研修会 etc.、主に生徒を対象としていたこうした催し物に、最近指導者の参加が目立ち始めている。先生が生徒と同じステージに立ち、第三者に評価やアドバイスを受ける。こうした姿は、これまでの指導者像とは明らかに異なる。

「子は親の背中を見て育つ」というが、生徒も先生の背中を見て育つ時代。指導者は今、従来の教え

込み教育から脱却し、自ら学び続けることによって学ぶ指針を示す教育へと変貌しつつある。

では、学ぶとは知識を増やすことなのだろうか。それとも何らかの体験を通して、新しい視点を得ることなのだろうか。

本特集では、「学びのプロ」である指導者をご紹介します。

7年間生徒とデュオを組む ～グランミューズに参加、今年15回表彰～

「生徒と同じ視点を持つ」とはよく聞かれる言葉だが、実際は持っているのだろうか。生徒の気持ちを大人の立場から推し量ることと、生徒と体験を共有するのでは、説得力が違う。7年前から生徒とデュオを組み、グランミューズ部門に参加している後藤先生。その体験は、ご指導にどのように生かされているのだろうか。



後藤 幸子先生
ピアノ・モーション代表、ピティナ正会員

ー 昨年、今年とグランミューズ部門（旧称アミューズ部門）を受けていらっしゃいますね。

現在大学3年生の生徒と、7年間ほどデュオを組んでいます。始めるきっかけは、7年前デュオ中級の課題曲に指定されていた『カーニバルがやってきた』（平吉毅州作曲）を弾きたかったのです。当時その生徒は中3で受験前でしたが、あえて出場しました。周りも中学生の参加者が多かったのですが、実は指導者である私が震えてしまいまして……。生徒は当時陸上部でしたので、度胸があって本番に強いんですね。「先生、震えてるよ」と言われてしまいました（笑）。

それほど難しい曲でもないのに、こんなにもステージ上では上がるものかと痛感しました。これはもう落ちたと思って結果も見ずに帰ってしまったのですが、蓋を開けたら予選通過していました。その後本選会場で弾きましたが、そのおかげで後日ソロで出場した別の生徒

に、ピアノの状態やホールの音響などのアドバイスができました。

夏のコンペは20人位出しますし、予選と本選の間には発表会もするので、友人の先生方は「よくやるよね」と笑いますが、実際に自分でコンペに参加して「これは生徒のためにも良い!」と実感しています。練習時間がなかなか取れなくて、大変ですけど、やって初めて分かることが沢山ありました。短時間集中練習法を考案しています。

現在ヤマハPENのスタッフもやっていますので、月の3分2くらいはセミナー講師として西日本、四国、沖縄を廻っています。それがきっかけで知り合った沖縄の赤嶺郁子先生とは、「遠距離連弾（笑）」もやっているんです。昨年は赤嶺先生と大阪でデュオ上級に出場し予選通過しました。仲川さんとはアミューズで全国本選に出場し、みなとみらいで弾きました。

生徒が出た時に「こんな気持ちになるんだろうな」と、共感できるようになりましたね。なにせ自分が一番緊張しますので……。練習していても、暗譜が飛んだり、ミスすることがあります。ですから本番でミスしても、「何でそんなことになっちゃったの?」と責める気にはなりません。以前はレッスン中も結構厳しかったのですが、今は「あんなに練習したのに、惜しかったね」と声かけるようにしています。



今年1月に開催した心斎橋ステップ。

ー 生徒への接し方が変わったのは、やはりご自分がコ



7年間パートナーを組んでいる生徒の仲川祥子さんは、現在大阪教育大学3年生。先生とデュオを組んでから、年々ピアノに対するモチベーションが高まり、今年はグランミューズ部門で初めてソロに挑戦したそうだ。

ンペ等に参加するようになってからでしょうか？

そうかもしれませんね。20才から指導を始め、毎日、34年間指導をしています。ピアノを教えるのが大好きで、教えてない時の方が具合が悪いですね、正月明けとか(笑)。生徒とデュオを始めたのは7年前からですが、コンペの季節になると私も生徒と共に指導、演奏両方でごんばるのが恒例となりました。他の先生の生徒さんや遠距離の方も多くコンペの前は大混雑です。現在は60人程生徒がいます。練習する子はよくやりますね。この二人は、ピアノも熱心に練習して、お勉強もよくできます。

ー デュオを始められた7年前の1997年頃から、コンペ出場者数が増え始め、1999年には初の全国決勝大会進出者を輩出。現在は毎年20名前後の参加者のうち、半数以上が予選通過、また全国大会進出者も安定的に輩出されていらっしゃいます。また、お忙しい指導とデュオの一方で、昨年はステップのステージも立ち上げされましたね。

ピアノニッシモステーションという名称で、昨年新設しました。もともと岡原慎也先生の公開レッスン聴講生グループがあり、それを母体としてステーションという形にしたわけです。今年1月に初めて開催しましたが、初回なので参加者募集が大変でした。メ切2週間前に本部から電話がかかり、「まだゼロです」と言われ、生徒や先生方にお声かけをしましたところ、75名が参加して下さいました。江崎光世先生がアドバイザーとして

東京からいらして下さり、デュオのワンポイントアドバイスもして下さいました。当日は運営スタッフでありながら、私もデュオで参加したんです。実はこの時15回継続表彰を受けました(コンペ14回・ステップ1回)。こうしたステージ経験があったから、今年のグランミューズは比較的余裕を持って受けられたと思います。

ー 色々実践の場を経験されることで、生徒さんにも良い影響を与えていらっしゃるんですね。まさに先生の背中を見て生徒が育っている、という例だと思います。本日はありがとうございました。



中央：山下紗也華さん(2003年度コンペA1級ベスト賞)、右：谷奈奈美さん(今年コンペ初挑戦でB級予選通過)。幼稚園で同級生だった二人は、小学校3年生になった今でも仲良し。

ピティナっ子のお母様のコメント



お母様：「小学校1年生から後藤先生の教室に通い始め、今3年目になります。以前2年間別の先生に習っていたのですが、ここにきてからぐんと上達したと思います。他の生徒さんが皆お上手なので、それに感化されて練習量も多くなりましたね。普段は英語、書道と、塾2校に通っています。教室の雰囲気もいいですし、子供も「行きたい」という気持ちになるようです。コンクール前は毎日、電話でもレッスンして下さいます。」(谷奈奈美さんのお母様)

後藤先生：「電話口でピアノの音を聞くだけで、指の形がおかしいとか、指使い間違えた、テンポ、リズムの狂いなどよく分かります。」

20・30代は自己投資と挑戦の日々！ ～視野を広げて見えてきたもの～

「まさか指導者である自分が、ステップに参加する日がくるとは思っていませんでした」と語る三谷知子先生。ピティナに入会してから、これまで指導者検定、グランミュージック部門、室内楽研修会、ステップと、立て続けに参加している。地元の仲間と演奏活動はしていたものの、ステップのような他人から評価されるステージに立つのは、学生以来。実際にステップ参加に踏み切った理由は？そしてその後指導はどのように変化したのだろうか。



三谷 知子先生
ピティナ指導者会員、スガナミ楽器ピアノ科講師

最初はグランミュージック（当時のアマミュージック部門）の広告を会報でみかけ、指導者でもステージに立てることを知ったので、挑戦してみました。大学生や卒業まもない若い方の参加はよくありますが、指導者自身がピティナを受けていいのか、初めは少し抵抗がありました。けれど、グランミュージック部門の褒賞で運良く奨励賞とステップ参加券を副賞で頂いたのをきっかけに、ステップに参加したんですね。

ステップは地元の福山支部でも数年前に新設されましたが、当初は「楽しむ人のためのステップ」という意識が大きかったので、まさか自分が出ることになるとは思いませんでした。

ー 心理的なハードルはありましたか？

そうですね。大学卒業後に指導を始めてから、多少のブランクはあったものの、演奏活動は続けていました。けれど実際ステップに参加してみて、発表会や演奏会と、他人に評価されて点数がつくステージで弾くのは、心理的に全く違うということを実感しました。これまで生徒を参加させる立場としては、「コンペと違ってステップはもっと気軽」と思っていたのですが、参加者本人にとってはどちらも大変だ、ということなのですね。

ー コメントをもらっていかがでしたか？

「最初は少し甘いかな？」と思いましたが、ステップは「人を育てる」のが基本だということが理解できました。それに、実際褒められたら嬉しいものです。また、生徒にはこのように言えいいんだな、というヒントも沢山頂きました。

ー 印象に残っているコメントを教えてくださいませんか？

（ステップではなく指導者検定の時に）「ピアノが好きだということがよく伝わってきた」というコメントを頂いたことがあります。自分ではそんなことは全く考えていなかったもので、意外に感じました。でもそこで初めて、「音大は卒業したけれど、感覚的には素人」だと痛感したのです。つまり職業意識に欠けていたと。それに気づいて、逆に素直になれましたね。それまで「これくらいのレベルは弾けないといけなく、このように弾かなければいけない、このように教えなければ、」というプレッシャーが、無意識的にあったのだと実感しました。

普段はレッスン等があつてなかなか練習時間が取れず、準備が満足いかないまま本番を迎えてしまうのですが、審査員がコメントを書いている音が聞こえる中で弾くのは、本当に緊張します。そこで温かいコメントを頂くのは、本当に嬉しかったですね。



それから自分が感覚的に思っていることでも、自信がなければ人には伝えられませんね。私はこれまで、プロの演奏家や指導者が何故そこまで自信をもてるのか、不思議だったんです。でもこの研修会を毎年連続で受講して、その理由が分かりました。何年か同じ先生に教えて頂いて、言葉の裏付け、つまり根拠があることが分かりました。

自分としても1年毎に視野が広がっているのを感じます。1年目に見えなかったことが、2年目に見えてきたり。自分でやってみると、いかに物事を習得するのに時間がかかるかが分かります。でも、やり続けていると、確実に変化は現れます。それが自分の中で確信できてからは、生徒に対しても寛大になったと思います。生徒のバックグラウンドや成長のスピードを客観的に冷静に見れるようになりましたね。

— 継続は力なり、を肌で実感したわけですね。

続けることは大事ですが、基本的に楽しくないといけません。以前は、「生徒に興味を持たせよう」という気負いがありましたが、今は「先生は楽しんでいるよ」という姿勢を伝えたいと思います。

アンサンブル研修オーディションに合格して、2001年度ビティナ・ピアノコンペティション入賞者記念コンサートに出演。(ヴァイオリン: 田辺秀樹先生、チェロ: 諸岡由美子先生/東京音楽大学本館ホール)

— その指導者検定の合格者インターンとして、ステップアドバイザーを経験されましたね。

ステップは「手紙を書きにくい気持ちで」と、アドバイザーの方からお聞きしていました。参加者が極度に緊張している気持ちがわかるので、注意すべきことも書きますが、それ以上にエールを沢山送ってあげたいですね。採点となると、つい短所や不足している点を聞かがちですが、長所を伸ばしてあげれば相乗効果で、短所も一緒に伸びると思います。

— また3年前から室内楽研修会にもご参加されていますね。

実は地元へ外国の四重奏団がきた時、パートナーを募集していたので応募してみたんです。先方は外国語だけど「音楽には壁はない」と思って飛び込んでみたものの、こちらはアンサンブルの基本的な合意が分からない、つまりルールを知らず、いきなりゲームを始めてしまったわけです。とりあえず形にはなりましたが、一緒に音楽ができたらもっと楽しいだろうと思い、研修会に参加しました。第一線で活躍されているピアノ指導者から直接アドバイスを頂いて、「人を育てるとは、こういうことか」と実感しました。

複数の先生がいらっしゃるので、視点の違う意見も得られるし、同じ事を言うにも表現が違うわけです。また弦の先生方からは、自分には全く無い発想のアドバイスを頂き、目からうろこが落ちました。



2003年冬に行われた秋吉台室内楽研修会にて。ピアノ、弦楽器の先生方より、アドバイスを受ける三谷先生。他の受講生も見学できる。左は研修会に参加したビティナっ子達。

「新しい師匠との出会い」からの再出発

室内楽研修会経験者は語る

数年前に室内楽研修会を初めて受け、それが大きな転機になりました。もともと学生時代からアンサンブル経験はありましたが、この研修会ではピティナ室内楽・協奏曲委員の多喜靖美先生や、第一線で活躍中のプロの弦楽器の先生方と知り合い、ピアノ・弦楽器双方の立場から有意義なアドバイスを頂くことができ、新たな視点を得ることになりました。

子供や音高・音大生達にもこのような演奏経験を積ませてあげたいと思うようになり、ステーション設立に至りました。2回開催しましたが、多喜先生のアドバイス等も頂きながら、第2回目は超満員となり、ステップの広がりを実感しました。小学生、中学生についてピアノの先生の参加が多く、とてもうれしく思いました。自分で体験してそれを生徒に還元しようという、熱心な姿勢の表れだと思います。音高・音大生の参加はまだそれほど多くないですが、これからもアンサンブルができる環境を提供し続けたいと思います。(自主企画で毎年秋に「やってみよう、室内楽」を主催)



中川 さとみ先生
多摩川ステーション代表、ピティナ正会員

室内楽研修会に継続参加するためには、ステップに出て推薦を頂く必要があるとのことで、今年自分自身もステップ初舞台を踏みました(ピアノトリオ)。緊張はしましたが、「このように弾いたら、こう評価されるだろう」という予想がつくようになりました。また生徒が頂いたアドバイスのエッセンスが、より理解できるようになりました。

また指導者検定の受験、全級合格がきっかけでステップアドバイザーの経験もさせて頂いております。他のアドバイザーの先生方から指導への取り組み方等を伺い、大変感銘を受けました。また子供の演奏も勉強になりましたね。こうした出会いが少しずつ転機につながっていったと思います。

普段は日経新聞の「私の履歴書」という、文化人、会社社長など著名人の半生を綴った連載記事を愛読しています。常に広い世界を見て好奇心を持ち、自分の可能性を信じて、目標に向かって努力したいと思います。

Column

「新しいジャンル、やるならとことん!〜ポップス編」

新しいジャンルを知る秘訣としては、まず、何か夢中でやってみるのがよいでしょう。例えば「私は指導のためにポップスを研究するの」などと、勉強する姿勢で聴くのではなく、「へー!」って埋没してみたいんですね。

何でもいいから1つ自分の好きなジャンル、例えばフランドスやハワイアン音楽でもいいし、クラブに行っ

てみるのもいいと思います。ジャズだったら1人のミュージシャンに絞って一まともに聞いてみるとか。

「ちょっと覗いてみよう」位な気持ちじゃなくて、例えばクラブに行くならバリバリファッションを決めて行くとか、ジャズを聞こうと思ったら20枚くらいCDをいきなり買ってきて、それを片っ端から聞いてみるとか。なり振り構わず飛び込んでみるのがお勧めです。やってみる



● 生徒と同じ視点を持つ力④ ●

ステップ参加者は語る

生徒の興味分野、ポップスに足を踏み入れる

大人の生徒がジャズが好きで、どうしても弾いてみたいというので、3年程前から「～コードによる～ピアノ指導マスター講座」に通い始めました。色々なコード進行が理解できるようになるに従って、いかにポピュラーが奥深い世界であるかを実感し、どんどんその世界に引き込まれています。幸運にも昨年ステップのポピュラー課題曲が系統化されたおかげで、生徒共々上達の指標が持てるようになりました。課題曲CDは発売と同時に購入し、また毎月2～3冊ずつ楽譜を買い揃えております。これまで20万円くらいは投資したのではないのでしょうか。

昨年秋に初めて、生徒と一緒にステップに参加しました。大人の生徒との連弾では「アイ・ゴット・リズム」を、自分自身はソロで「二人でお茶を」と「リベル・タンゴ」（2曲とも発展5課題曲）を演奏しました。ジャズに合わせて二人で衣装を揃えてベストを着用、ソロの時は「リベル・タンゴ」を弾くためにどうしても情熱的になりたくて、赤のブラウスに着替えました。弾く曲の雰囲気を出すために、何を着ようか考えるのもス

テップの楽しみの一つです。ステップを実際に受けてみて、2曲を同じレベルで仕上げるのは難しかったですね。「なかなか思い通りに弾けない」という大人の生徒の気持ちも、初めてわかりました。

今年4月には展開1でステップに参加しましたが、この時Sを頂き、モチベーションがさらに高まりました。また自分の指導は間違っていない、という自信もつきました。今年12月にはTOKYOポピュラーステーションのチーフスタッフとして運営、また展開2で参加する予定です。

ポピュラーの勉強を始めて改めて気づいたことがあります。それは現代音楽であるギロックの良さを再確認したことです。そのメロディがなぜお洒落なのか漠然としか分かりませんでした。コード進行を学んだことによって、その理由が明確に理解できるようになりました。正統派クラシックの和声にも、何か通じるものがあるかもしれません。

これからも指導者として、また学習者として、ジャンルに縛られず柔軟に勉強を続けていきたいと思います。

松原三恵子先生
ピティナ指導者会員



異分野に、意外なヒントあり VOL.1

と案外ジャズって凄く奥が深いんだな、あるいは思ったほど恐くないじゃないと思う場合もあるでしょう。

1つ知れば、それ以外のジャンルも何となく分かるような気がします。しかも、そうやって楽しみ方を知っておけば、その後ちょっと歴史を紐といてみようとか、今度は聞き比べてみようとか、同じ曲のアレンジだけど、ラテンのミュージシャンがやるとこうなる、でもジャズミュージシャンがやるとこうなるんだななどと、先生方ならではの、知的な部分でのアプローチも楽しめます。

でも、最初の入り口としては、まずとにかく楽しんでみて頂きたいなと思います。

（ピティナ・ピアノ指導セミナー vol.23 より抜粋）



春畑セロリ先生
作曲家

読書、コンサート通い、異分野交流。 ～常に最新のものを見聞き～

「指導だけでは『減る』から、常に最先端のものを見聞きして、「補う」ことが必要」とは、林苑子先生の信条である。もちろん指導体験は多くの喜びを与えてくれるが、生徒のレベルに合わせて、ある種の無理を自分に強いながら、教室の閉じこもっているだけではもの足りない、ということだろう。



林 苑子先生
ステップアドバイザー派遣委員長、
ピティナ正会員

ー 最近行われた演奏会では、プログラムノートをご自分で書かれていますね。演奏会にもよく行かれるそうですが。

テクニックや演奏解釈、プログラムの傾向等は私が日本で聞き続けてきた間に、10年20年の周期で変化しました。さいわい東京は世界のコンサートマーケットのひとつなので、最新のレベルに触れることができます。会場では大勢の同業者にお会いします。

「どうも最近のピアニストと自分のテクニックは違う」と気づいたのは、まだ学生だった頃です。ギーゼキング、レヴィーン、ネイガウス他、手に入る奏法の本を読み、レガート奏法を知ってコンサートに出かけると、前列に座って、姿勢、タッチ、ペダリングに注目しました。息遣い、汗、震えも観察しました。近年はコンサートホールによって好きな場所があり（サントリーは2階LB、オペラシティは2階Cの響きが好きです）、ピアニスト達の音を聴き比べています。

ー 先生は大変な読書家でもいらっしゃいますね。

私達のやっている音楽は、「美」を追究するものから、最後は「これが好き、これが良い」という感覚やひらめきが大切です。そのひらめきというのは、まず論理を踏まえた上で「選択する」という事じゃないかと思うんですよ。ヨーロッパ文化はとにかく、論理が基礎に

あります。

私は封建的な家庭に育ち、卒業と同時に結婚しました。当時は留学の枠が厳しく、ヨーロッパは私にとって憧れの夢の世界でした。小さい時から本好きだったことも手伝って、音楽の専門書の他にヨーロッパを理解するために、ギリシャ神話、聖書物語、ホメロスなんかも夢中で読みました。

ー 頭と耳、両方から知識と音をバランス良く入れていらっしゃるんですね。先日の演奏会のプログラムノートは、時代背景とともに、その当時の空気感も伝わってくる文章でした。

音楽史と生活の歴史を、学校で習った政治史に結びつけると面白いですね。例えばフランス革命後のナポレオンの出現。ベートーヴェンが第3交響曲「英雄」のタイトルを、彼に失望した時消してしまった話は有名ですね。ワーグナーは1848年の革命で先頭に立って演説したためお尋ね者になってしまい、ミュンヘンでのオペラ初演に出られない。ピアニストとしても有名なハンス・フォン・ビューローが代わりに指揮をして大成功を収めます。それなのに、ビューロー夫人、あのリストの娘コジマをワーグナーは盗ってしまう。ひどい話なんですけど、コジマの内助の功でワーグナーが大物に変わっていくことを考えると、音楽家同志の関係、政治の動向の関わりがわかってきますね。革命後の動乱の中から次第



に市民階級が台頭し、その後産業革命が起こって、また文明が一步前進します。音楽はこうして、その時代の人間の生活の上に成り立ってできているんです。

例えばベートーヴェンやショパンが生きていた19世紀前半は電気も自動車もありませんでした。馬は大切な移動手段でしたから、音楽にギャロップ、タランテラのようなリズムが出てきます。夜は真暗で恐ろしかったでしょう。ノクターンを夜想曲と翻訳した人は、怖さ、静けさ、孤独を理解していたのでしょうか。時はゆったりと流れていたのだと思います。コミュニケーション手段だって、当時は手紙なので届いてからどうやって返事を書くか、一日位考えてから紙に書く、その行為が人間の思考や相手との関係を熟成することになると思うんですね。携帯だと便利ですが、コミュニケーションがすぐに終わっちゃうんですね。

— 時代背景といえば、ピアノ作品の進化はピアノの技術革新がと深く関わってますよね。

モーツァルトのピアノとベートーヴェンのピアノは大きな違いがあるんですね。実はハイリゲシュタットに行った時、あるピアノを弾かせて頂いたんです。壊さないようにそっとベートーヴェンの月光の冒頭を弾いたのですが、その途端に「あ、これは今日のピアノのルーツだ」と思ったんです。タッチ、ペダルの様子が今のピアノの原型でした。あとで日本の調律師の方に伺ったら私のカンには当たっていました。

ベートーヴェン前後でがらっとピアノは変わった、ですからモーツァルトは現代のピアノのような音は知らなかったわけですね。今の進化したピアノで作曲家のイメージをもっと素敵に表現することに異存はありませんが、こうした時代背景を知っておく必要はあるでしょう。

— 楽曲の背景を知るとい知識のほかに、耳も鍛えていってほしいと思います。

自分が音を出す事に関しては、テクニックの問題と自分のイメージの問題があるんですね。やはり音のイメージのレベルをどんどん上げたい訳です。ありとあらゆる音を聴いて、作品の背景知識と一緒に、様々な音のイメージを引き出しに記憶しておきます。そのためにも、日

頃からオペラ等あらゆるジャンルのコンサートに行くようにしています。また作品鑑賞の前には、本を読んでいきますね。美術館に行くのもとても好きですよ。ヨーロッパの美術館や教会には宗教画が多いので信者ではない私は出かける前に宗教画を解説した本を読み返すことにしています。耳といえば言葉も大切ですよ。留学された方にはとてもかかいませんが、英独仏伊の辞書はピアノの傍に置いています。

私のコンサートに来てくださる方は、異分野で何かモノを作ることに携わっている友人が多いのですが、音楽的には素人ながら、なかなか的確な意見を言ってくれます。

— 先生のご関心が幅広いので、それが交友関係にも反映されていらっしゃるんですね。

ところでレッスンでは、楽譜の横に作曲家年表を置いていましたが、「この作品は18〇〇年作曲だから、この作曲家の影響を受けている」というように、作曲家の相関関係が垣間みえてきますね。

発表会のプログラムを、作曲年順に並べたことがあります。生徒の学年や作品の難易度は一切関係なくしました。音楽史の流れが自然に伝わって好評でしたね。

— 確かに生徒さんは、色々な作曲家の生没年をよくご存知でした。先生の意識が、ちゃんと生徒さんに伝わっているんですね。先生と生徒の距離感が絶妙なのだと思います。

指導者が生徒に伝えたいことは山ほどありますが、「私とあなたの距離よりも、私とベートーヴェンの距離の方がうんと遠いの。だけど私のほうが少し先を歩いているから、一緒にベートーヴェンの方を向いていけばベートーヴェンに近づけます」というのが私のスタンスです。本人が自分の意志で歩く時に、ガイドとして役に立ちたいのです。これ迄お会いした各界の尊敬する方々は、少年のような好奇心と恥じらいをお持ちでした。音楽をする時、私は歳を忘れて、20歳頃と同じ心に戻ってしまうようです。ピアノに限らず、これまで尊敬する方々が絶え間なく努力を続けている姿を見て、自分もそうあろうと思っています。

生徒に応じて指導法をカスタマイズ ～工夫材料は身近にある～

現在国際コンクールで活躍する生徒の幼少期に、その土台を作った辻井雅子先生。基礎勉強は大変時間がかかるもの。それを無理なく、生徒に納得させながら取り組ませるには、創意工夫が必要だ。辻井先生はかつて自分が奏法の切り替えて苦労したご経験から、練習方法を色々と工夫したそう。「何でも難なく弾ける」わけではなかった、そこに勉強のヒントが隠されている。



辻井 雅子先生

ピティナ正会員、
桐朋学園付属子供のための音楽教室勤務

— 先生の元門下生（沼沢淑音さん/2003年度若いピアニストのためのチャイコフスキー国際コンクール3位、高田匡隆さん/2004年度仙台国際コンクール2位）が、国際コンクールで活躍されていますね。お二人とも自立している印象を受けますが、どのような生徒さんだったのでしょうか。

沼沢君（17才）はとても大人びていて、演奏会やCDをよく聴いて勉強していました。「あのピアニストの弾き方、先生はどう思いますか？僕はこう思います」と時々思いがけない質問をしてくるんですね。知っていれば精一杯答えますが、中には「今答えられないから、調べておくわね」と返事することもあります。日頃から正直な付き合いをしていて、人間同士の信頼関係があるので、お互い何でも話せるんですね。

高田君（26才）は小1から中3まで指導しました。成長期にはピアノ以外にも色々と興味があつたようで、ピアノへの関心を持続させるのが大変でしたが、子どもの頃から良い音楽性を持っていたので、音楽への好奇心を育てながら、基礎をしっかり仕込みました。基本的な読譜の仕方や、脱力、指先のコントロールなど、毎回のレッスンの中で2時間はこうした基礎をみっちりやりましたね。

— 幼少期に受けた基礎教育があるからこそ、後々大きく花開いているんですね。

レッスンとは、生徒が作るものの手助け、アドバイスをすることだと思っています。曲は先生が作るものではありません。答えを選ぶための素材を提供してあげることが、指導者である自分の役割だと自覚しています。基本的な楽譜の読み方や練習方法は徹底的に教えますが、表現力や音楽性に関しては生徒にクエスチョンを投げかけて、自分で考えさせるようにします。「こうとも考えられるし、そうとも考えられる」という選択肢を増やす為に、公開レッスンなどによく足を運んで、新しい指導法や奏法を勉強しています。

私は料理が好きなのですが、1回目はレシピ通りに作りますが、2回目はすぐにアレンジしてしまうんですね。素材をどのように工夫して活かせばいいか、という点に関してはとても興味がありますね。

— そうした「創意工夫」のきっかけになった事は何でしょうか？

実は中学時代、ピアノは力を入れて弾くものと教えられたのですが、高校の時に初めて脱力を教わり、奏法を変えるという経験をしました。当時はかなり苦労しましたが、そこで練習方法を工夫するという習慣ができました。それ以来、自分に足りない部分を補うために、創意工夫することは得意です。

現在地元以外でも教えていますが、色々な先生、生



徒さんがいらっしゃるの、なるべくその子に分かりやすい方法で教えるように心がけています。いつも工夫材料には事欠きませんね。例えば地元のカルチャーセンターでシルバー世代の方も教えていますが、全く弾けなかったある74歳の方が、ほんの3ヶ月間で皆の前で模範演奏ができるくらい上達しました。このことは私の指導法の確認という意味で、良い経験となっています。

また身体障害者の子もレッスンに来ています。豊かな音楽性を持っているのですが、左腕は肩から先がなく、右は3本の変形した指だけという状態ですので、教材には特に工夫が必要で、毎回私がアレンジしています。一度米国の音楽指導者が日本の指導現場見学で来日された時、その子へのレッスンを見てもらったのですが、響きで作り出す綺麗なレガートに大変心を打たれた様子でした。レッスン後にその子は3本指で握手してもらい、親子共々感激していました。今度は作曲の専門家にお願いして、曲の幅や厚みを増やしていきたいと考えています。

自分が苦労した経験があるので、困っている人に手を差し伸べたいですね。

— それぞれ状況や能力の違いがあっても、「しっかりした土台を作る」という先生の目的が明確にあるので、どこをどう工夫すればよいか、はっきりしているわけですね。

家を建てるのと同じで、それぞれのパーツのエキスパートが集まって、「自分はこの部分をやるから、貴方はそこお願いね」という感じで、何人かで一人の子を育て上げるのが理想だと思います。その子にとって何が一番大切な、常に客観的に見極めるように心がけて、基礎がしっかり仕上がってきたところで、別の先生にお願いすることもあるんですよ。適切な養分をタイミングよく与えるのがポイントです。ただ先生と生徒の相性の問題がありますので、普段から色々な先生方とお付き合いするようにしています。

これは私の持論ですが、基礎的なことは経験ある指導者がやるべきで、ある程度土台ができたならそれ以上は現役の生徒が指導してもいいと思っています。指導者が生徒の横で弾いてお手本を示すことは、大事なことです。

— 各地の生徒さんをみて、気になる点がありますか？

例えば「どういう曲を弾いてるの？ 何分の何の曲？ 調は？ ベートーヴェンらしさとは何？」等と聞いても、何も答えられない生徒が多いんですね。何をしたいのか、自分はその曲をどう表現したいのか、目的意識や考える力が薄れているように感じます。これは社会全体にもいえることですが、特に若い世代の政治や社会に対する関心が、どんどん薄れていることに危惧を覚えます。

音楽をやるということは、例えばモーツァルトやベートーヴェンの気持ちを察して弾く、ということでしょう。人の気持ちを察すること、これは人間の社会生活の基本です。そういったことをピアノは全て求められるのですね。だから演奏にはその人のパーソナリティが出ます。ピアノはまさに「考えること」なんです。

— 考える力をつけるために、先生がレッスンで工夫されている点を具体的に教えて下さい。

「ワンパス・ブラボー特別シール」というのをやっています。その子の実力よりも数レベル易しい本を1冊与えて、それを一人で1回で仕上げてくるように言います。今まで教えたことを利用して自分で一度やらせてみると、教わったことの定着度や応用力を確認することができます。

また「先生交代劇」では、先生が生徒になって、わざわざ生徒の直したい部分を真似して弾いてみて、生徒自身に注意させるんですね。自分で修正すべき箇所を自覚させることが目的です。

— いつでも、生徒の自立心や自意識を持たせることを念頭に置いていらっしゃるのですね。これからも、成長するにつれて着実に花開く生徒さんを育てて下さい。

知られざる名曲を発掘 ～好奇心は子どもの未来も開く～

「良いものは皆に紹介したい」全てはここから始まる。メンデルスゾーンの姉ファニー・ヘンゼル、クララ・シューマン、19世紀作曲家テオドール・キルシュナーetc、知られざる名曲を自分の演奏で世に送り出すシュパイデル先生。

先生の活動フィールドはそれだけにとどまらず、子供達への演奏会提供、音楽家のネットワーク"Piano Podium"の設立まで広がる。好奇心を持つことが、新しい価値観の発見・発信へ、さらに子供の可能性を開くという活動に繋がっている。

— 先生は女性作曲家の作品や知られざる名曲を発掘・演奏されていらっしゃるそうですね。

メンデルスゾーンの姉、ファニー・ヘンゼルやクララ・シューマンの作品を録音したことがあります。またモーツァルトの息子がバリエーションを、またベートーヴェンの兄ヨハンが4手のデュオを作曲したりしているので、ステージで演奏したこともありました。

私がそのような活動をしていることがドイツ国内外に知れ渡り、オリジナルの楽譜を所有されている方々から情報を頂くことも多いです。またラジオ局が、珍しい曲の演奏を頼まれたり、CD会社から録音のオファーを頂くこともありますね。ロマン期だけでなく、近現代を扱うことも多いのです。

— 歴史の中に埋もれている作品を演奏する、その理由を教えてください。

「その音楽が美しいから」です。19世紀の女性は家事・教会・子育てに縛られていた時代ですが、才能あふれる女性はいました。例えばファニー・ヘンゼルの才能には、弟フリデリックも気づいており、姉に一種のジェラシーすら感じていたようです。若い頃に発表されたメンデルスゾーンの作品には、実は姉が作曲したものもあったそうで



ゾントラウト・シュパイデル先生
Sontraud Speidel
カールスルーエ音楽大学ピアノ科主任教授

す。もちろん後年は、姉自身の名前で公表されましたけどね。

— 近現代作品についてはどうでしょうか。

同時代の作曲家は沢山いますし、そういう方々と触れ合うのは普通のことです。日頃から新聞や本を読んだり、音楽家や作曲家と実際に会うことです。また国際コンクールの審査等で、知らない現代曲に出会うこともあります。「素晴らしい」と思えば、自分で演奏し、他人にも紹介したくなるということです。

— 既存の曲だけではなく、知られざる作品や現代曲も積極的に世に広める、とても重要な活動だと思います。ところで先生は、子供のためにコンチェルトの機会を与えたりしていらっしゃいますね。

優秀な子供をオーディションで選んで、奨学金を授与したり、コンチェルトの演奏を機会を与えたり、病院や社会施設に子供を連れていったりもしています。私が様々な活動を通して得た基金で、そうした若い音楽家にチャンスを与えています。

— Piano Podiumの活動の一つですね。ピティナと方向性が似ているようにも思います。これからも是非活動が続けて下さい。



Column

異分野に、意外なヒントあり Vol.2

読譜力をつけるために「作曲」しませんか？

きちんとした読譜力をつけるために、8小節のメロディーでもいいから、作曲してみることをお勧めします。作曲することによって、譜面に書かれている基本的なリズム、テンポ、拍子、ダイナミクスの指示、楽語、臨時記号等を大切に、又正確に深く読もうとする気持ちが湧いてくると思います。

バロック・古典派とロマン派では、スタイルや作曲技法が違います。例えばバッハは、ターン、モルデント、ブラトリラー、前打音等の記号で非和声音（和声外音）が記されており、またモーツァルトはバッハの時代の記号の他に倚音等は装飾音符で示されていたので、旋律線の骨組みがはっきり分かりました。

しかしロマン派になるとそれらの記号や装飾音符は、実際の音価で記された音符で書き表されるようになりました。ショパンやリストの作品には、5連符7連符等、多くの連符が出てきます。非和声音（和声外音）が理解できていないと、中心になる音がどれか把握できません。

また休符の扱いも大切ですね。例えば「ウン、タータ」か「ンタータ」か、8分休符か16分休符かで音楽の持つ行き方は違ってきます。作曲家は自分の求める音楽を表現するために、どちらの休符にするか、頭の中で何度も反芻して選ぶわけです。またその休符は、次のフレーズに行く為の反動力の休符なのか、フレーズが終息したときの休符なのか。作曲家が意図しているフレーズングを理解しないと、音楽の求める方向性がぼやけてしまいます。

自分で作曲をしてみると ♭ファにするか ♯ファにするか、あるいは八分音符にするか16分音符にするか等、音符一つ、休符一つ書くのに思い悩むことでしょう。又、たとえ8小節という短い旋律線ひとつ書くにも全体の構造を考えて、どのような山を作りたいのか、どうしたら山ができるか、ゼクエンツの使い方等、想像以上に時間を費やすことになるでしょう。こうした経験をもとに、作曲家が書いた音符、休符、様々な記号や楽譜等、一つ一つの意味を真剣に考えて頂ければと思います。

また同じ作曲家の作品を、粗読みでいいから3曲くらい一気に弾いてみると、例えばスクリャーピンってこんな音楽、ショパンとはこの和音が違う、等というのが分かると思います。作曲家の生まれた時代の政治、経済、又育った環境なども重要な手がかりです。演奏によって作曲家の色分けができ、持ち味が出せると、より人をひきつける魅力的な音楽が作れると思います。



樫場 富美子先生

室内楽・協奏曲委員、東京音楽大学作曲科助教授、作曲家協議会会員、21世紀音楽の会会員。



「勉強し続ける指導者」は、常に新しいもの、未知のものに挑み続ける意欲に溢れている。それは、ご自身が受けた教育だけを全てとはせず、それを土台にさらに応用・発展させる力と換言できる。

21世紀を迎えて既に数年が経過した今、子供たちを取り巻く環境や社会は変質している。同時にピアノ指導者に求められる資質も、10年、20年前とは変化している。時代の流れに応じて柔軟に変化・進化できる先生は、21世紀を象徴する指導者像と言えるだろう。